

# 女性 経営者 に聞く!

「まちのお医者さん」  
として、確かな技術で  
地域の安全を支える

有限会社寿設計 代表取締役

飯塚 静 栄 氏



この度は、機関誌「福島の進路」の「女性経営者に聞く！」シリーズへ寄稿の機会をいただき、心より感謝申し上げます。私は福島県いわき市を拠点に、県内の公共および民間の建築設計を手掛ける有限会社寿設計の代表を務めております。

弊社は、初代が昭和27年（1952年）に開設して以来、地域の皆様に支えられ、70余年の歴史を刻んでまいりました。私はこの歴史を受け継ぐ三代目として、日々の業務に励んでおります。

## 創業者が灯した技術の火と、 受け継がれる理念

創業者である木村長壽は、昭和25年（1950年）に建築士法が制定された後、福島県内で最も早く一級建築士試験に合格した一人に数えられます。インターネットもパソコンもない時代、創業者は図面一枚一枚に魂を込め、試行錯誤を重ねて地元の建物を設計する技術を確立しました。

以来、地元の公共建築、寺社仏閣、民間施設など多種多様な設計を手掛けてまいりました。なかでも昭和54年（1979年）完成の「いわき市水道局本庁舎」

は、当時、大規模物件の多くを東京の大手事務所が手掛けていた時代において、地元の設計事務所が初めて担当した記念すべき大型公共建築となりました。地元企業でもこれだけの仕事ができるのだという誇りは、今も私たちの原動力となっています。

創業者は、「設計事務所は顧客の代理人である。顧客に最大の利益をもたらすレベルの高い設計を、顧客の財力と業界の力で実現する役目を担っている」という理念を残してくれました。この「誠実な

代理人」としての姿勢は、今も私たちの心に深く根付いています。

## 時代とともに進化する 「経営のバトン」

二代目である父からは、「長く続けるためには、時代に合わせて柔軟に進化し続けることが大切だ」と教わりました。



創業者の木村長壽（昭和52年撮影）。建築士法制定後、県内でいち早く一級建築士となり技術の礎を築いた。



昭和54年完成のいわき市水道局本庁舎。当時、地元設計事務所として大規模公共建築を手掛けた記念碑的建築。



本殿



水屋

創業者から受け継いだ、伝統建築への深い理解と確かな技術。

私は、建築設計事務所を単に自分の「作品」を作り続ける場所とは考えていません。むしろ、お客様が抱える建物への悩みや願いに、そっと寄り添える「まちのお医者さん」のような存在でありたいと願っています。お客様の声に真摯に耳を傾け、対話を通じて最適な解を見出すこと。そのために必要な技術を、日々愚直に磨き続けています。

変化の激しい現代において、私の経営には二つの柱があります。

一つ目は、「適正規模経営と心のゆとり」です。規模の拡大を追うのではなく、一つひとつの案件に丁寧に向き合うことで、確かな質の維持と必要な利益を確保します。かつては家庭を後回しにするほど自分を追い込んだ時期もありましたが、良質な設計には設計者自身の心の豊かさが不可欠だと気づきました。週末に夫と過ごす穏やかな時間や、一人の生活者として街を歩くひととき。そんな日常の安らぎがあるからこそ、月曜日からまた誠実にお客様と向き合う活力が湧いてくるのです。

二つ目は、「属人化からの脱却とチーム力の醸成」です。先代の頃は、仕事の進め方がどうしても担当者個人の力量に依存しがちでした。しかしそれでは個人の負担が大きく、万が一の際にお客様へご迷惑をおかけするリスクもあります。

そこで私は30年という時間をかけ、情報を個人に留めず組織全体で共有し、「誰かが誰かのフォローができる体制」への変革を進めてきました。この仕組みがあるからこそ、現在は少数精鋭の職員が、それぞれの得意分野やライフスタイルに合わせて力を発揮できています。

例えば弊社では、育児を経て5年ぶりにキャリアを再開した女性建築士が活躍しています。彼女はパートタイムという限られた時間の中で、プロとして見事な集中力を発揮し、確かな結果を出してくれています。環境が変わっても専門スキルを活かせる「お互い様」の精神と、それを支える情報共有の仕組みが、結果として会社全体の質の向上をもたらしています。



復興の拠点として完成した双葉町消防団の屯所。  
当時の建物には震災発生時刻のまま止まった時計。



「まちのお医者さん」として、被害を受けた現場でも専門知識を活かし建物の安全性を診断する。

## 専門性の追求と、故郷・福島 の復興へ

時代の変化と共に、私たちに求められる専門性も高度化しています。

私の技術者としての土台は、高専で専攻した土木工学と、大学で深めた建築学にあります。大地やインフラを扱う「土木」と、その上に立つ空間をつくる「建築」。双方を専門的に学んだ経験は、建物の安全を守る「構造設計一級建築士」として、目に見えない「力の流れ」を設計し、それを皆様に分かりやすくお伝えする上での大きな強みとなっています。

また現在は「ZEB（ゼブ）プランナー」としての活動にも注力しています。ZEB（ネット・ゼロ・エネルギー・ビル）とは、高い断熱性能や効率的な設備の導入、再生可能エネルギーの活用により、年間のエネルギー消費量を実質的にゼロにすることを目指す建物のことです。ZEBの普及は、環境負荷の

低減だけでなく、災害時のエネルギー確保という観点からも地域貢献に繋がると確信しています。

2011年の東日本大震災では、専門家として「被災度区分判定」などの活動に奔走しました。近年では、「双葉町消防団の屯所」の設計にも携わらせていただきました。ここは震災当日、団員が力を合わせてシャッターをこじ開けて出動したという記憶が刻まれた場所です。地域の安心と安全を支える復興の象徴である拠点の再建により、故郷の歩みに貢献できることに深い喜びを感じています。

また、こうした仕事を通じて、次世代を担う若者たちに「建築は、地域の未来を形づくり、守り継いでいくやりがいのある仕事だ」と伝えていくことも、私の大切な使命だと感じています。

これからも、培ってきた技術と経験を活かし、お客様の想いに寄り添う「まちのお医者さん」として、福島と共に一歩ずつ歩み続けてまいります。